

Media English 研究法私論

—acronym から PC まで

宮 本 倫 好

Essay on Media English

—from Acronym to PC

Noriyoshi Miyamoto

This paper deals with media English which appears in printed media such as newspapers and magazines. Although the demand by the Japanese that they be able to read media English with ease is increasing tremendously, it is not an easy task for them to handle as new words and expressions are being born almost daily. Surely, media English is a living English that reflects the reality of society most vividly. That's why the background information is most important for thorough understanding of each piece of news reports, articles, etc.

This paper, therefore, discusses how new words as well as expressions in some cases have been made and transformed. It also refers to euphemisms, p.c. phenomena and sensitive expressions on minorities.

はじめに

Media English とは新聞、雑誌など活字メディアに現れた英語という意味である。本稿はその中でも、読解という「受信の仕方」を中心にまとめた。日本人の Media English に対する需要は、まず「新聞、雑誌が楽に読める」ことに主眼があると思われるからだ。

Media English のレベルは、普通母国語の高校卒業生程度の読解力が目安といわれる。一般的に言って「高校卒プラス社会経験三〜五年」あたりに読者レベルを設定するのが、英語圏、日本語圏にかかわらず、大衆社会の現実であろう。

Media English なるものは広義の現代英語に含まれていて、画然とした境界線があるわけではないが、この分野は、新語、新表現がやたらに創出されて、目まぐるしく変化する「生きた英語」であり、その社会の「現実の姿」を最もビビッドに表出するものであることは論を俟たない。もっとも、はかない寿命で終わる表現、語彙も数多いから、その「一過性」の見極めが Media English 研究の困難なところであり、英語研究の伝統的権威が Media English 研究に対し、正当性付与に躊躇する根源的な理由でもあろう。しかし、外国人の英語研究者、あるいは英語圏地

域研究者の立場からすれば、Media English 研究という分野は当然あってよいし、実用性から見れば、不可決の研究分野と言えよう。

本稿では、Media English の文体、見出し語など、比較的容易な特色への言及は他に譲り、語彙、表現を中心に社会的背景の中で、Media English がどう生成、変遷してきたかなどを中心に捉えて行きたい。

acronym, abbreviation

簡略化するために acronym、あるいは abbreviation を多用するのも、Media English の特徴だ。そもそも acronym あるいは abbreviation は、1930年代のニューディール時代にしきりに使われるようになった。例えば、TVA (= Tennessee Valley Authority), WPA (= Works Progress Administration), PWA (= Public Works Authority) といった具合だが、何と言っても盛んになったのは第二次大戦から。軍事用語では大半が acronym あるいは abbreviation を使用した。中には the Commander in Chief of the US Fleet の略語である CinCus が "sink us" と聞こえるとあって、急いで CominCh に変更されたこともあった。

第二次大戦中の略語で最も有名なものの一つに D-day がある。1944年6月6日、連合軍が Normandy に上陸した日として記憶されるが、D-day 自体にその意味はない。「秘密にした軍事作戦の開始日」のこただ。ではDは何の略か？ destruction...demolition...devastation? と native speakers でもふと考え込むというが、Dは単に day の略。同様に秘密の開始時間 H-hour の Hも hour の略に過ぎない。

すっかり一般名詞化したのが、本来 acronym であったのが radar (= radio detecting and ranging) である。戦時中のイギリスが発祥だ。最近では scuba (= self-contained underwater breathing apparatus), AIDS (acquired immunodeficiency syndrome) がある。また、戦争直後の SCAP (= Supreme Commander for the Allied Powers) は泣く子も黙るマッカーサー元帥の別名として、特定世代以上には懐かしい acronym だろう。

jeep は戦後の日本人に強烈なインパクトを与えたアメリカの軍事力、あるいは文明そのものの象徴とも言えるが、その語源は必ずしも明確ではない。general purpose の abbreviation である G.P. から来たとする説、E.C. Segar の有名な漫画 "Popeye" に登場する動物 "Eugene the Jeep" からとする説が有力だ。 Random House Historical Dictionary of American Slang は後者の説だ。

その後も朝鮮戦争やベトナム戦争が膨大な軍事用 acronym を生んだが、現在もこの伝統は続き、経済関係、技術関係のものも多いが、新しい社会現象も登場する。例えば CFS (= chronic fatigue syndrome ・慢性疲労症候群) ESOP (= employee stock ownership plan ・従業員持株制度) PWA (= person or people with Aids) M & A (= merger and acquisition ・企業合併、買収) などがある。最近で面白いのは、Emily's list だ。これは普通の名詞に見えるが、Emily = Early Money Is Like Yeast の acronym で、A group whose purpose is to further the political candidature of women. の意味。そのココロは、イースト菌がパン粉をふくらますように初期投資、すなわち人材の発掘を促すことが大事ということ。80年代のアメリカの国内選挙で、民主党の女性候補者発掘運動の一環として始まり、たちまちイギリスにも及んだ。

「西洋男性中心の古くさい教養主義」として少数民族、革新女性などから攻撃されている acronym に、DWEM がある。Dead White European Male で、A derogatory term denoting any of the famous historical personages traditionally forming the accepted canon of European writers, artists, and thinkers (The Oxford Dictionary of New Words) として使われる。プラトン、ダンテ、シェークスピアなどばかりを勉強しても、人類の歴史の本質は分からないという強烈な主張がある。

近年の acronym、あるいは abbreviation で頻度の高いものを見ると、BTW (= by the way), FOB (= friend of Bill), Gift (= gamete intra-fallopian transfer) NAFTA (= North American Free Trade Association), POSSLQ (= Partner or Person of Opposite Sex Sharing Living Quarters), SME (= Small and Medium-sized Enterprise), SoHo (= Small Office, Home Office), TINA (= There Is No Alternative.), UNPROFOR (= United Nations Protection Forces), V-chip (= Violence chip), ZIFT (= zygote intra-fallopian transfer) などがある。その他、コンピュータ関連では、かつての軍事用語のように acronym や abbreviation のオンパレードだ。

新語・その生成過程

新語、新表現は時事英語研究者にとって、最もチャレンジングな世界である。一説によると、米語には平均年間二万語が新しく生まれているという。多くは一過性の運命で、例えば Webster の New International Dictionary に認知されるにはかなりの日時と実績が必要だ。それまでが新語ハンターの活躍期で、獲物に正当性が与えられたとたん、新しい獲物を求めて狩りに出る。ただ、最近では internet を使うと、ホットな新語をかなり簡単に渉猟できるから、以前のような手間と興奮が幾分なくなった。

新語が登場するにはそれなりの社会的背景があるから、そこらを調べるとおもしろい。例えば、bikini は1947年登場の、フランスのデザイナー Louis Read によるツーピースの水着で、仏領ビキニ環礁から取った。その由来は、現地住民のあらわな着衣によるとする説と、水着の悩殺力を水爆実験場としての水爆の破壊力に例えたものという両説があるが、説明としては後者の方がおもしろい。

戦後の最も有名な新語 cold war はコラムニスト Walter Lippmann が最初に使ったといわれたが、それより早く47年に政治家の Bernard Baruch、厳密にはそのスピーチライター Herbert Swope の創作によるとされる。それに並ぶ傑作とされる iron curtain は、46年に Winston Churchill が Fulton で行った演説からというのが通説だが、想像上の障壁という意味では1819年に既に存在し、政治的な意味合いでは1920年代から使われていた。demilitarized zone (DMZ とも略称), brainwash などは朝鮮戦争中に認知され、英語として定着した。domino theory は54年に既に評論家の Joseph Alsop が使ったというのが、本当に人口に膾炙 (かいしゃ) するようになったのはベトナム戦争中だ。こうしてみると、新語が一般に認知されるにはそれなりの社会環境の整備が必要なが分かる。

朝鮮戦争中の chopper (= helicopter or to go or transport by helicopter) と並んで定着した honcho (= squad leader) は日本語の「班長」から、また、hooch (= house) は同じく日本語の「うち」からで、GI (= government issue) が日本の愛人を囲う家という

ところから出た。ベトナム戦争中もしきりに使われたが、「うち」で待っている人は日本人、韓国人からベトナム人に代わった。貧しかったアジアの悲しい語源である。

to buy the farm は to die in combat を意味するようになったが、この由来はおもしろい。元々軍事用語で、(of a pilot or airplane) to crash の意味だった。Random House Historical Dictionary of American Slang によると、

Jet pilots say that when a jet crashes on a farm the farmer usually sues the government for damages done to his farm by the crash, and the amount demanded is always more than enough to pay off the mortgage and then buy the farm outright. Since this type of crash is nearly always fatal to the pilot, the pilot pays for the farm with his life.

とある。これが後に、戦死一般を指すようになったのだ。

to frag は不人気だったベトナム戦争を象徴する恐ろしい新語として登場した。これは fragmentation device or grenade (破砕性手榴弾) からきたのだが、気に食わない上官をこれで殺傷するという意味だ。

Unpopular officers refuse to lead their men into the battle for fear of being fragged.

というように使う。

ベトナム戦争中、ベトナム人を軽蔑的に呼ぶ用語が復活したり新作されたりした。古い蔑称が復活したものには slant-eye, gook など。他に slope, dink, zip などがあった。この中で slant-eye, slope などは「目尻がつり上がって見える」というところから、アジア人全体を指すこともある。gook, zip などは「バカ、カス」という侮蔑語で、zip に至っては、zero intelligence potential の acronym だからひどい。しかしベトナム人も戦時中、米兵のことを「ナンバー・テン (最低)」と呼んでいたから、お互い様かも知れない。

ベトコンは Charlie と呼ばれることが多かったが、この由来は次のようだ。以前は通信で字解きをする時「A は apple の A」という式にやった。日本語でも「アサヒのア」「サクラのサ」という式の決まり文句があった。その中で Viet Cong の略称の V, C が字解きでは、Victor と Charlie だったので、ベトコンは Victor Charlie または Charlie と呼ばれた。米兵が軽蔑して止まなかったこのベトコンが文字通り、Victor (勝利者) Charlie になったのは、言葉の上とはいえ、痛烈な皮肉である。

キューバ危機関連で一挙にもてはやされるようになった用語に hawk and dove がある。鳩が平和の象徴という歴史は古いが、鷹を war hawk として使ったのは1798年の Thomas Jefferson を嚆矢 (こうし) とする。現代的な意味は、ある人の軍事的傾向を示すものだが、日本語の鳩派、鷹派では、広く保守、革新の意味合いにも使うことがあった。

宇宙開発の進展で宇宙新語が数々登場した。reentry, blastoff, mission control, A-Ok, launchpad, thrust などすっかり定着したが、その一つ glitch (= a minor malfunction of an apparatus) は元来 Yiddish で、66年に宇宙飛行士 John Glenn がこの意味に初めて使った。ただ、宇宙関係用語で注目すべきは、新語と思ったものの多くがはるか以前、science

fiction の作家たちによって創造され、その借用語だということだ。Bill Bryson 著の Made in America によると、astronaut (1880), spaceship (1894), space suit (1924), rocket ship (1928), star ship (1934), space station (1936), blastoff (1937), spaceman (1942), time warp (1954) ということになる。

科学技術の進歩に伴う新語も当然多い。ジェット時代の到来と発展は、新語も jet-hop(1952) から jet-port (1953), jet set (1960), jet lag (1966), jet fatigue (1968), jet syndrome (1968) へと進んでゆく。この中で Pan Am が1970年に就航させた jumbojet の名前は新語史上、極めてユニークなものとして特筆に値する。

jumbo は西アフリカの黒人の守護神 mumbo jumbo に由来する。1880年代にロンドン動物園にやって来た赤ん坊象につけられた名前が Jumbo だった。この時は、後年世界の見せ物で最大の動物になろうなどとは誰も夢にも知らず、「大きい」という意味はまったくなかった。この Jumbo をロンドン動物園から買い取り、アメリカ中で見せ物にしたのは興業師の P.T. Barnum であったが、彼は希代のベテランで、成長した Jumbo の巨大さを徹底的に誇張して宣伝した。お陰で大人気を博したが、いつの間にか jumbo は巨大さを示す代名詞になった。そして jumbo cigar, jumbo suitcase と何でも大きいものに jumbo を付けるのが定番になった。ちなみに、象の jumbo は交通事故で死んだが、興業師の Barnum は決してめげず、はく製を陳列しては、生きていたときよりも余計儲けたという。

コンピュータ関連用語の登場は枚挙に暇がない。その中で、スペース関連と同様、歴史的語源も色々ある。例えば、computer bug は a small mistake in a computer program that stops it from working correctly の意味に使われるが、本来 a small insect の意味の bug がコンピュータと関連したのは次のようなエピソードからだ。

1945年、当時まだ真空管式だった米海軍のコンピュータが突然故障した。技術者たちが必死に原因究明に当たったところ、電気のリレー・スイッチの接触部分にはさまっていた虫が原因と分かった。それ以後、コンピュータがどんどん精密化しても、故障の原因を取り除くことを「虫を除く」という意味の debugging で表すことがそのまま残った。

最近すっかり日本語でも定着した hacker は、someone who uses computers in order to secretly use or change the information in another person's computer system と情報化時代の悪者の意味になっているが、元来はコンピュータ・マニアで、不備な点や故障などの発見に情熱を注ぐ人、というニュートラルな意味だった。to hack は元々、なたなどを使って密林を切り開いてゆくという意味があり、passwords の密林を頭脳で切り開くというイメージから、新時代の hacker が誕生したのだろう。

80年代初めに登場し、その半ばには完全に市民権を獲得した新語に couch potato (= someone who spends a lot of time sitting, eating potato chips, and watching television) がある。他に、= a person presumed to have the physical shape of a potato caused by too much slouching on a couch in front of a television set という説もある。

これがホーム・パソコン時代になって、mouse potato という新語に生まれ変わった。a person who spends an excessive amount of time in front of a computer, especially one who uses it online という意味だ。分かりやすく言えば、an internet addict のことだ。mouse はもちろん、パソコンの pointing device である。

その他、様々な誇張した表現を生むのも journalese の世界である。超大物を「帝王」と呼ぶ

が、czar は政界、mogul はメディアや娯楽産業、magnate はビジネス界と区分けができそうである。President Bush が William Bennett を麻薬取締の責任者に任命した時、メディアは Bennett を the drug czar と呼んだ。このように、czar は特定のポストへ任命された者で、選挙された者ではない。cable-TV whiz の Ted Turner は、media mogul であり、Microsoft の創立者 Bill Gates は magnate となる。しかし、これは一応の区分けで、mogul と magnate は境界線が必ずしも厳密ではないようだ。

大物ではないが、80年代に政界に登場した新種が spin doctor である。政治家や有名人に色々アドバイスする。だが、handler でもなく、press agent、あるいは PR flak でもない。spin を Longman Dictionary of American English で引くと、a way of saying or showing something that makes it seem to have particular qualities, used especially in politics and advertising とある。野球の spin ball を思い出せば分かりやすいかも知れない。さらに、spin control として、the act or skill of describing a bad situation in a way that makes it seem better than it is, used especially in politics and advertising とある。従って、spin doctor は someone who describes a situation in a way that makes seem better than it is ということになる。初出は84年、Reagan-Mondale 両大統領候補のテレビ討論の時だ。

新語・現状

新語探究には様々な道がある。その国の現状をつぶさにフォローしておれば、流行する段階でキャッチできるが、native speakers に比べて普段の情報量が格段に劣る外国人には唐突に新語が出現した感がして、面食らう。それをどう調べるか。

- (1) 正攻法は背景知識の中で追及することである。背景知識、流れが頭に入っておれば、新語に戸惑うということは比較的少ない。これは後に詳述する。
- (2) 新語辞典、専門書の巻末にある glossary などを利用することである。しかし、辞典にはタイムラグが避けられないし、glossary の利用度も局限される。
- (3) 湯気の出ている新語の調査は、native informants の利用がてっとり早いですが、誰にも手に入るというものではない。それに、native speakers であれば良い、というものでもない。そこで、ここではまず、不完全ながら internet がそうした要望をかなり補ってくれる点に着目したい。

ほんの幾つかの例を挙げよう。underground English に興味がある人向きかもしれないが、internet の The Alternative English Dictionary から English slang をひいてみた。全体で17ページ、約500語。当然ながら sex や minority にかかわる単語、表現が圧倒的だが、適度に解説が入っていて通読しても楽しく、sex 表現には次第に寛容になり、minority には神経過敏になっている時代精神の移ろいが良く分かる。

例えば、bitch の説明はこうだ。

An oppressive woman. The term has gained general acceptance in recent times; the original term refers to 'female dog.' 例文・John found Mary out to be a vicious bitch.

また、南部の農民に対する侮蔑後であった redneck はこう解説されている。

A racist white person. This term previously referred only to the rural prejudiced whites, mostly farmers, who have reddish necks. However, its usage has become a lot looser in the past few years and now includes any racist whites.

他に internet で Ling 215: New Words in English というのをプリントアウトしてみた。Rice University の言語学部教授の手になるものだ。全量12ページ。やや地域的、世代的偏りはあるが、硬軟取り混ぜた世相を写す鏡の役割をしている。

例えば、BFE という abbreviation の意味はこうだ。Very far way. Beyond Fucking Egypt なぜ Egypt かというと、

Egypt was chosen somewhat arbitrarily as a country on the opposite side of the world.

というから深い意味はない。用例としては、My car is parked BFE. が挙げられている。

他に、baggravation という新語の意味はこうだ。これは bag と aggravation の合成語で、a feeling of annoyance and anger one endures at the airport when his bags have not arrived at the baggage carousel but everyone else's bags have その気持ちは良く分かる新語だ。似たような新語に meander と neanderthal の合成語の meanderthal がある。an annoying individual moving slowly and aimlessly in front of another individual who is in a bit of a hurry この気持ちも分かる。

問題はこうした新語がどれだけの命脈を保つかだ。多くは恐らくバブルとして消え去る運命だろう。「そんなことは問題ない」という「言語オタク」は大いに新語発掘にいそしみ、他の疑問派は比較的定着した新語を手堅く調べることに限定すべきである。

日本語では？

逆に日本語の新しい表現が新聞などに頻出すようになったとき、英語で何というか調べてみることも、時事英語に関心を持ち続ける意味で有効かもしれない。例えば、大蔵官僚や日銀行員たたきが起こった98年、「総会屋」「接待文化」「ノーパンシャブシャブ」「どぼん」などという語が日本のメディアをにぎわした。これを外国の特派員がどう英語に表現したかを例示すると、

- * 総会屋 = a corporate racketeer (Time)
- * 接待文化 = entertainment-for-favors culture (Time)
- * ノーパンシャブシャブ = \$300-a-head dinners at a shabu shabu restaurant in Tokyo's Shinjuku area-where the main attraction was not the food but waitresses without underwear (Time)
- * どぼん = literally the sound of a heavy object plopping into the water, which referred to a night out for the bank's heaviest hitters at restaurants where

dinner might cost \$400 a head and attractive kimono-clad women serve the sake
(Time)

日本人でも分からないような業界用語、隠語が次々飛び出して、翻訳に頭を抱えている外国特派員の顔が目に見えよう。しかし、こういった研究は、いわば「英語オタク」向きであり、正統的時事英語研究者からすれば、ほんの枝葉の部分に過ぎないだろう。

ちなみに、The Oxford Dictionary of New Words (1997年版)を見ると、日本語からは kaizen, kanban, karaoke, karoshi, otaku, zaitech が出ている。kaizen は a Japanese philosophy of continuous improvement in working practices and personal efficiency であり、kanban はトヨタの kanban system で、just-in-time 方式としても知られている。karoshi は日本経済の負の部分だが、最近の日本の経済危機で、どれだけの負の新語が、今後日本語から加わるか。otaku はやや意外だが、英語の nerd や米英新語の anorak (= a derogatory or jocular term for a person who pursues an interest with obsessive dedication), propeller-head (= a mildly derogatory slang term for a person who pursues an obvious interest in computers or technology; perhaps with reference to a beanie hat with a propeller on top, as popularized by science fiction enthusiasts; a boring or studious person), techie (= an expert or enthusiast for technology, especially computing; a technician), trainspotter (British slang: = a derogatory term for an obsessive followers of any minority interest or specialized hobby such as collecting locomotive numbers as a hobby) と同類らしいから、世界的な現象のようだ。

Euphemism

euphemism を Longman Dictionary of American English で引くと、a polite word or expression that you use instead of a more direct one to avoid shocking or upsetting someone とある。このように、euphemism は言語文化の一形態であるから、時事英語研究でも避けて通れない。伝統的に性に絡むものが多く、性病は漠然とした用語 social disease で表現されたから、1933年に syphilis の画期的治療薬ができた時、新聞はその具体的説明に大いに困惑したという話が残っている。

rape も禁句で、assault で代行された。日本語でも新聞紙上では、強姦というどぎつい言葉を避けたのと同様である。だから rape のケースでは、次のような描写になった。repeatedly struck and kicked his victim, hurled her down a flight of stairs, and then assaulted her. pregnant も禁句で、She is expecting, or she is expectant. という形で表現された。

近代は性の解放という側面を持つから、standards of acceptability も徐々に変化した。特に第二次大戦後は、アメリカも性革命の洗礼を受け、性に絡む表現も変わりはじめた。euphemism から、より direct な表現へ脱皮した。その変わり目は50年代だった。Merriam Webster Third New International Dictionary が cunt, shit, prick などそれまでの taboo words の幾つかを載せた。しかし、fuck はまだ禁句だった。現在でも国務省は prostitute を使うことを拒否し、an available casual indigenous female companion と表現しているという。

伝統的活字ジャーナリズムも慎重である。1980～1993年の the New York Times に shit

が現れたのはたった一回。しかもそれは書評欄だった。1987年にまじめなプロダクションが Sammy and Rosie Get Laid という映画を作った時、the New York Times はこのタイトルの広告を受けつけなかった。lay = to have sexual intercourse with の意味があり、Did you ever lay her? というように使う。get laid はまさに、「女(男)と寝る」に当たる表現だ。the New York Times としてはとても "fit to print" といかなかったのであろう。広告だけではなく、同紙のコラムニストの William Safire はコラムで内容に言及しながら、このタイトルそのものを活字にすることを拒否した。前記 The Alternative English Dictionary によると、relatively common term, but not acceptable in polite society とある。

しかし、卑語が社会的に重大な意味を持つ場合は「この限りにあらず」となる。ウォーターゲート事件でホワイトハウスの秘密録音テープが公開に追い込まれた時、ニクソン大統領らが使っていた汚い言葉は米国民にはショックであった。shit などがしょっちゅう出てきたのだ。最高裁判事候補 Clarence Thomas がセクハラで告発され、その証言の一部始終が公開された時にも、新聞は ass, crap (= fecal matter), dong (= crap, shit) などを登場させざるをえなかった。最近のクリントン大統領の不倫疑惑の捜査報告書は、一部はまるでポルノだが、the New York Times も The Washington Post も全文を臆せず載せた。

軍事や外交分野は euphemism を極度に追求する。第二次大戦中の日本の大本営発表が「敗退」を「転進」、「敗戦」を「終戦」、戦後の「占領軍」を「進駐軍」としたように米語にも多い。朝鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争は無数の euphemism を生んだ。例えば(カッコ内が本来の意味) pacification (= eradication), strategic withdrawal (= retreat), sanitizing operation (= wholesale clearance), accidental delivery of armaments (= bombing the wrong target) などだ。

湾岸戦争でイラクが外国人を人質にとった時、国務省は restrictees, detainees と呼び、ブッシュ大統領は inconvenienced people who want to get out と呼んだ。しかし当のイラクは臆面もなく foreign guests と呼び続けた。他に、クリントン大統領自身が元ホワイトハウス実習生との不倫関係を inappropriate relationship と呼んだのは、euphemism の極致である。

軍事・政治関係で最近の極めつけの euphemism は ethnic cleansing であろう。これは旧ユーゴスラビアの内戦で生まれた言葉で、The Oxford Dictionary of New Words によると、the mass expulsion or extermination of people from a minority ethnic or religious group within a certain area という意味で、大量の虐殺が行われた。この他外交用語では、スパイを働いた外交官を persona non grata と上品に呼ぶように、euphemism が大いに幅を利かせている。

経済面で企業の必死の生き残り作戦が展開される中、その厳しさを中和さすかのようにさまざまな euphemism が生まれた。まず lean という形容詞は、slimmed down or rendered more efficient or competitive through the reduction of unnecessary costs or expenditure の意味に使われるようになった。これはサッチャー英政権が唱えた自由市場経済の用語として登場し、後に日本の自動車生産が「カンバン・システム」という名で追求した生産効率システムの形容詞として、しばしば引用された。

続いて、downsizing, rightsizing, restructuring などがしきりに使われるようになった。downsizing は本来、日本車の攻勢に対抗するために、アメリカも小型車生産に乗り出すことを意味したが、dismissal, redundancy の euphemism として、従業員を削減し効率化を図る意

味と、コンピュータを小型化し、パソコン、ワークステーションを多用して事務の合理化を図る意味が付加された。rightsizing, restructuring も従業員削減を意味した。これはリストラという日本語になって輸入された。

これに関連して、outplacement という新語も生まれた。The Oxford Dictionary of New Words によると、the action or process of finding new employment for workers, especially executives, who have been dismissed or made redundant となる。

また職場には、restructuring が我が身に及ぶことを避けるために、presenteeism 現象が出ているという。the practice of being present at one's place of work, especially for more hours than required by one's terms of employment という意味だ。「そんな厳しさはごめんだ」という向きには、downshifter という手があるかも。

A person who makes a change of career or lifestyle to a mode that is less pressured and demanding ということで、さらに言い換えれば、a deliberate decision to reduce or withdraw completely from financially rewarding but stressful work so as to achieve a more meaningful and happy life となる。

PC現象

euphemism の延長線上で、70年代に起こった注目すべき言語現象に PC がある。PC は politically correct または political correctness の略である。politically correct という言葉そのものは18世紀後半にすでに使われているが、appropriate to the prevailing political or social circumstances という字面通りの意味だったが、70年代の初期になって、言語面での性差別に反対する社会運動の一環として、俄然注目を集めることになった。そして racism, disability, homosexuality, agism など各種の差別に絡む微妙な言語問題にたちまち拡散した。その背景としてはもちろん、女性、少数民族、身障者、老人など被差別者と見られてきた人達の権利拡張運動の進展がある。それまで少数者に対して、侮蔑的、あるいは偏見を持って使われていた言葉が言い換えの対象になったわけだ。

そうした新しい社会的意味合いの下で PC を初めて使ったのは National Organization for Women 会長 Karen DeCrow の1975年の言葉といわれる。これは時代の流れとして最初はおおむね受け入れられた。しかし、その行き過ぎから、やがて保守陣営の巻き返しにあい、PC は「言葉狩り」だとして、その部分を誇張して皮肉り、一種中傷的、軽蔑的な意味合いで使用されることが多くなったのが90年代になってからだ。

例えば、nigger, chink, fag などは社会的に葬られるべき言葉であることに誰も異議はなかろう。ちなみに、chink には a small rift という意味があり、中国人（東洋人）は「目が細い」という西欧的認識から、中国人を軽蔑的に呼ぶときに chink or Chink を使った。c(C)hinkie or chinky も同じ意味だ。また、chinks で Chinese food の侮蔑語になる。fag は homosexual を意味する侮蔑語で、名詞にも動詞にも使う。faggot も同様の意味だ。

しかし、英語は本来男性優位の言語構造を持つ言葉だから、人間、人類全体を指す場合でも、男性名詞が使われてきた。man, mankind, forefathers, founding fathers, A man's home is his castle. といった具合だ。こういう場合、people, humanity, human being などという無性名詞に取って代わるのが現在の傾向だ。87年に改定した The Revised New Testament

of the New American Bible は Not on bread alone is man to live. が、One does not live by bread alone. というように、完全に nonsexist となっている。

Ms. が最初に登場したのは1949年だというが、実際に広く使われるようになったのは、70年代になってからだろう。そしてもう完全に市民権を得たといえる。同様に、49年に作られた flight attendant は70年代後半に一般に認知され、chairman に代わる chair または chairperson は現在では汎用名詞になった。同様に fireman ⇒ firefighter, policeman ⇒ police officer が普通になった。ただし、firewoman は使わないのに、policeman, policewoman は使い分けすることによって生きのびている。

問題は起源が sexist とは限らない膨大な名詞、表現に入り込んでいる man をどうするか。例えば、gamesmanship, busman's holiday (= a holiday spent in activities similar to one's work), manhole, first baseman, manslaughter, manmade, freshman, manacle, manicure, manufacture などだ。ここに PC 批判派が付け入る余地があるが、詳しくは後述する。

少数派蔑視表現は「左ぎっちょ」にも及ぶ。左ぎっちょは人類の歴史の初めから忌むべきものとして差別されてきた。左ぎっちょを意味する sinistral はラテン語の sinister に由来し、left, unfavorable などの意味があった。また left は長らく、evil, witchcraft, impunity, uncleanness などの意味合いがあった。アメリカでは現在、左ぎっちょはもう社会的差別の対象ではまったくないようだが、差別に由来する表現は残っている。

例えば、left-handed には awkward, unlucky, dubious といったニュアンスがある。従って、left-handed compliment は A Dictionary of American Idiom によると、an ambiguous compliment which is interpretable as an offense とあり、その例文として、

I didn't know you could look so pretty! Is that a wig you're wearing?

が載っている。となると、left-handed compliment という表現は避けるべきだということになろうか。

white が pure, innocent, fair などのイメージを持つことが多いのに反し、black には偏見を強める否定的なニュアンスが多い。これが白人、黒人という人種差とそれに伴う差別問題に重なるところにアメリカの複雑さがある。black humor, black box, black magic, black market, black sheep などだ。

金融の自由化が進む中で、black information (= the information held by banks and other institutions about those regarded as bad credit risks, and likely to be 'blacklisted' as regards future borrowing) の意味だ。これの反対が、white information (= a positive statement of a customer's creditworthiness which may be passed on to a credit reference agency without the customer's being informed) である。白、黒の対比が鮮やかだ。

もちろん、黒=悪のニュアンスとはまったく無関係な、ニュートラルな言葉も多い。例えば、blacksmith, black snake, black and white などだ。こうした単語、表現をどう扱うか微妙な問題もあるが、PC 批判派はこのあたりも皮肉の対象にする。

婦人、少数民族、障害者などに対する差別と取られる用語を一切廃止するというスタンスを political correctness とすると、当然行き過ぎ、言葉狩りが問題となる。そこを過大に皮肉っ

たのが90年代の PC 批判だ。Henry Bread, Christopher Cerf はユーモアと痛烈な皮肉を交えて、The Official Politically Correct Dictionary & Handbook にまとめた。

このあたりのいきさつを The Oxford Dictionary of New Words は次のように述べている。

By the late eighties, political correctness had come to be seen by many at best nit-picking and over-sensitive and at worst puritanical and repressive, and as a potential enemy of freedom of thought and expression. Its proponents were held to be perpetrators of a new kind of bigotry, which might become as pernicious as the prejudices they sought to overturn. At the same time, circumlocutions used in an attempt to avoid politically incorrect language, were widely ridiculed. By the early nineties use of the term political correctness was almost always pejorative...

前記の The Official Politically Correct Dictionary & Handbook には、例えば、ugly は politically incorrect だからと、cosmetically different, deaf を aurally inconvenienced, bald を hair disadvantaged, dishonest を morally different など数百の absurd euphemisms の例が挙がっている。

中でも challenged の使い方が微妙だ。これは80年半ばにアメリカに始まり、イギリスにも広まった。handicapped or disadvantaged よりも前向きなニュアンスがあったが、physically challenged, mentally challenged などはまだ euphemism の一部とみなされたが、背の低いことを vertically challenged, 頭の悪いことを cerebrally challenged などと称するに至っては、反対派の皮肉な造語としか言えなくなった。ついには、料理べたを culinarily challenged, 処女を hymenally challenged という造語まで登場したのである。

minorityの呼び方

PC との関連で「minority をどう呼ぶか」には、それなりの知識が必要だ。黒人の場合差別の歴史が絡むだけに、用語の変遷は複雑である。negro は black を意味するスペイン語、ポルトガル語である。既述の Made in America によると、negro が英語で最初に使われたのは1555年だ。1587年には nigger が初めて登場するが、当初は侮蔑的意味あいはなく、単に negro の発音上の変形であつたらしい。1880年代あたりまでは、黒人は名詞では普通、blacks と呼ばれ、coloreds は丁寧な呼び方だった。しかし、19世紀末以来、negro が次第に好まれるようになった。黒人解放組織の中核であつた NAACP (National Association for the Advancement of Colored People) が設立されたのは1909年だが、正式組織名に colored を使いながら、大文字のNで始まる Negro を黒人の呼称の標準として採用するようキャンペーンを始めた。その結果30年代までに、Negro がほぼ定着した。

50年代から南部を中心に始まった黒人解放運動は、black という呼称を徐々に正面に押し出した。「肌の黒いこと」を誇りに転化させようとしたもので、70年代までにほぼ定着した。しかし、多元文化主義は文化のルーツ重視を主眼にしたため、African-American, Afro-American, Afri-American, Afra-American, Afrikan など様々な呼称が生まれた。こうした変遷について、黒人指導者 Jesse Jackson は Martin Luther King を称えた会合で次のように言っている。

Just we were called colored, but were not that, and then Negro, but were not that, to be called Black is just as baseless. Every ethnic group in this country has reference to some cultural base. African Americans have hit that level of maturity.

それでは black は現在では politically incorrect か。こちらについて、Longman Dictionary of American English はこう解説している。

Using black as a noun when talking about someone's race is usually offensive. However, it is acceptable in some situations, for example when you are comparing racial groups: Relations between blacks and whites in the area are good. Using black as an adjective is less offensive: a Black man. However, African is usually the best choice of adjective: an African-American woman.

nigger、あるいは黒人的発音によれば nigga は、黒人社会でも広く使われていたが、現在では非黒人が使えば最も侮蔑的な言葉となる。しかし、急進的な黒人の間などでは、政治的自己主張として、意図的にお互いを nigger, or nigga と呼ぶことは珍しくない。rap あるいは hip-hop (= A street subculture which combines rap music, graffiti art, and break-dancing with distinctive codes of dress and speech) culture の世界とも密接にかかわる。ロサンゼルス黒人 rap group に Niggaz with Attitude (N.W.A.) というのがある。その意味で nigger or nigga は politically correct だという奇妙なことになる。しかし、これは黒人の間だけであり、白人が使うことは許されない。The Oxford Dictionary of New Words の例文を見てみよう。

These guys were in shock—they had no idea that black people sometimes call each other nigga as a term of endearment. They saw the brothers at the party shouting "What's up, nigga?" to one another and one of my white friends got so excited he started yelling. "Hey, how you niggas doing?" The music stopped and everyone looked at them.

黒人問題に関連する言葉に、slum がある。元来、an area of a city with old buildings in very bad condition, where many people live という意味だが、明らかに「黒人居住区を指す」として、一時 ghetto という言葉に取って代わられた。ghetto の本来の意味はヨーロッパで、the part of a city where Jews were required to live in former times だ。しかし、それがアメリカで、a part of a city where any racial or other minority group lives, especially because of economic or social restrictions という意味に転じた。平たく言えば、大都市の黒人、プエルトリコ人などのお粗末な居住区である。

しかし、犯罪多発を嫌う裕福な白人は続々市内を脱出して郊外に居を求めた。こうして豊かで自足的な郊外が続出するに至って、the suburbs はアメリカ社会で、政治的、経済的、社会的に特殊な意味を持つようになった。すなわち郊外時代の到来であり、郊外文化の完成である。これと平行して、有産階級に見捨てられた大都市内部は、さらに荒廃が進み、そこには貧困から脱

出できない黒人下層などが沈殿した。ここにおいて、inner city は単に地理的な概念でなく、ghetto に代わる euphemism として、マイノリティ下層の住居地帯という社会的、文化的意味合いを持つに至った。

ちなみに、70年代の終わりから、suburb の略語 burb が登場した。これは80年代後半にはイギリスでも定着した。ただし、イギリスの場合は、conventional and boring の含意があり、やや軽蔑的である。アメリカでは car-burb (= suburbs where cars are essential) のような合成語も登場し、次のような使用例がある。

Yet, for all our car-burb creations and post-Los Angeles Angst, the romance of the city dies hard. (New York Times Book Review)

ところが、白人文化と対決色を強める黒人の一部は、自虐的に nigger or nigga を仲間内で使うように、slum を黒人居住区の実態を表す言葉として復活させていると、the Los Angeles Times は伝えている。

ところで、黒人の差別用語とされる Sambo は元来、次男を意味するナイジェリア語で侮蔑の意味合いは本来なかったという。

他の少数民族に対する様々な通称、蔑称の使用に用心深くあるのは当然だ。アジア人を指す言葉、Asian, Asiatic, Oriental の差について、The New American Webster Handy College Dictionary は次のように説明している。

Oriental has traditionally been the term used by Westerners to refer to people and objects from or related to Asia. However, it is vague and ethnocentric, because of its implied establishment of Western as the norm. It is better to use more specific terms, such as Asians, Chinese, etc. Avoid Asiatic, because it is often considered mildly offensive.

Latino と Hispanic については両方用いられている。ラテン文化に誇りを持つ人には Latino が好ましいと聞いたが、黒人のように強烈な差別の歴史を持たず、自己主張もそれほど厳しくない人たちだから、使用に当たって余り気にする必要はないと思われる。American Indian か Native American にかについても同様だ。

ちなみに、a guy という名詞は、典型的な米語で男性を指す、とするのが普通の字引の解説だ。しかし、この語にも様々な変遷がある。米語の語源は1605年11月5日、国会爆破陰謀事件の主犯として捕まった Guy Fawks からで、英語では a grotesque looking, ill-dressed, or ridiculous person, (esp.) an old man; (hence) a person who is an object of ridicule or derision あるいは a comical or joking fellow の意味がある。

それが米語では a man or boy という意味が普通で、1920年代ころまでは、a main guy = a man in authority or of importance といった積極的な意味にも使われた。現在でも通例、a wise guy, a tough guy といったように形容詞を前に置いて男性を示すことが圧倒的だ。もっとも、^(a)a regular guy, ^(b)a wise guy となると、ニューアンスが字面と少し違って、前記の

A Dictionary of American Idioms によると、それぞれ、^(a) = a friendly person who is easy to get along; ^(b) = a person who acts as if he were smarter than other people; a person who jokes or shows off too much の意味となるなど、guy は様々な広がりを持つ、実に多彩な米語である。

ところが、最近では you guys, those guys などと複数で使う場合は、男女の、また女性だけのグループに対しても用いられることがある、と載せている辞書がある。英々辞典でも既述の Longman の Dictionary of American English は said when talking to or about two or more people, both men and women としている。

しかし、単数でも以前から女性に使うケースが結構あったことが、Historical Dictionary of American Slang を詳しく調べてみると分かる。すなわち、1920年代以降から既に、She'll understand. She is a great guy. とか You're a right guy, Miss Avery. とかいった例文が沢山載っている。一般的ではないかも知れないが、少なくとも口語では、女性単数に対しても使われていたわけだ。それが少なくとも複数形では男女混用になったのはいつ頃からか、必ずしも明確ではないが、男女同権化の進展という社会現象と無縁ではなからう。

一方で、形容詞として、interesting and fully understandable only to men の意味で最近よく使われることを、前記の Historical Dictionary of American Slang は次のように例示している。

The Soviets are working on a mirror in outer space to reflect light back to Earth.
A real guy project.

また、At last, a real guy movie. という映画評の文章も載せている。

これに対して、interesting and fully understandable to women を指す語は chick である。例文として同辞書は、Definitely a chick movie... a movie that men were totally mistified. という CBS-TV の解説を挙げている。ちなみに、chick は元々 baby chicken を意味し、60年代には「カワイ子ちゃん」といったニュアンスで若い女性に対しよく用いられたから、女性解放が進んだ現在、politically incorrect であるとして、反発する女性が多いようだ。だから、辞書によっては、offensive であると注意しているものもある。

References

- Beard, Henry, The Official Politically Correct Dictionary & Handbook (Villard Books, New York, 1992)
Beard, Henry, The Official Sexually Correct Dictionary & Dating Guide (Villard Books, New York, 1995)
Bryson, Bill, Made in America (Avon Books, New York, 1994)
Holder, R.W., A Dictionary of Euphemisms (Oxford University Press, 1995)

Knowles, Elizabeth, The Oxford Dictionary of New Words (Oxford University Press, 1997)

Lighter, J.E., Random House Historical Dictionary of American Slang, Volume I, Volume II (Random House, 1994)

Longman, Addison, Longman Dictionary of American English, Second Edition (Addison Wesley Longman Limited, 1997)

Makkai, Adams, A Dictionary of American Idioms, Third Edition (Barron's, 1995)

Morehead, Albert, The New American Webster Handy College Dictionary, Third Edition (Penguin Books USA Inc., 1995)

Padwa, Lynette, Everything You Pretend to Know and Are Afraid Someone Will Ask (Penguin Books, 1996)